

宗教と人間

竹中尚文

1. 社会の中の宗教

「無宗教だという連中は人間じゃない」というのは、1980年代にソ連軍と戦うアフガニスタン人から聞いた言葉である。宗教を否定するソ連軍は人間ではなく、イスラム教を信じる自分たちが人間であるという。宗教が自分たちを人間としての証であるという。当時、戦争を取材するジャーナリストたちもこの言葉を聞いた。そして、戦場に同行するジャーナリストは「あなたの信じる宗教は？」と尋ねられた。日本人のジャーナリストはとりあえず仏教だと答えたそうだ。

日本人で「自分は無宗教者」といっている人が多いように見える。そうはいいいながらも、お盆やお彼岸にお墓参りに行ったり、秋祭りに出かけたり、クリスマスやバレンタインデーだといったりしている。また、身近な人の死に際してお骨を拾うこともする。不要な物だからと火葬場で

廃棄を望む人は多くない。

このような行動に私は違和感をもたない。我々の日本社会での行動には、色濃くあるいは薄く宗教的要素が含まれているように思う。宗教的意識の強い人はその行動に反映されるのは当然のことであり、宗教的意識の薄い人はそれなりの行動になる。日本の社会は、特定の宗教を支持してその宗教文化が社会の背景となることはないが、宗教に肯定的であるように思う。それをあえて「私は無宗教だから…」と言わされているところに若干の危惧を感じる。

私はかつてチャプレン(chaplain)の養成に少しだけ関わったことがある。チャプレンとは病院や軍隊などの組織の一員としての宗教者である。多くの宗教者がその教団や宗教組織の一員であるが、チャプレンはそうではない。日本では、チャプレンそのものが珍しいが病院で働く医療チ

ャプレンや宗教系の学校で働く教育
チャプレンがいる。私が関わったの
は、アメリカ軍の従軍僧の養成であ
る。彼女はアメリカ軍で初めての仏
教僧であった。アメリカ軍ではキリ
スト教の神父や牧師が多いが、いろ
んな宗教の兵士がいるので仏教僧も
必要とされていた。

私が属する浄土真宗では、従軍僧
養成に関して「かつての世界大戦で
戦争協力をした反省から、そのよう
な従軍僧を養成するのはどうか」と
いう声があがったと聞く。世界大戦
の時、戦争反対の声を上げる僧侶を
擁護できず戦争協力の立場をとった
教団としての反省は当然である。し
かし、従軍僧は直接的に戦争協力の
ための存在ではない。従軍僧は、兵
士のための存在である。兵士とい
うのは自分の命の危険や他者の命の危
機にさらされる。その時に「命とは、

死とは」という問いに共に向き合う
のが従軍宗教者の働きである。

私が子どもの頃、父親が一度だけ
話したことがあった。父親が特攻隊
に選ばれて滑走路で襲撃命令を待っ
たまま夜が明けた日のこと。友人が
特攻隊として死んだ時のこと。再度
語ることはなかった。また、子ども
の私は父親に「戦争で人を殺した
の？」とダイレクトに尋ねたことが
あった。父親は答えなかった。

兵士が戦場で直面する体験は命の
意味を問うものである。それを不問
にしてしまうと言うのは、兵士の人
間性を不問にするものである。そう
いう意味では、宗教を否定する社会
の軍隊は恐ろしい。アフガン人がい
う「あいつらは人間じゃない」とい
う言葉、そうした恐ろしさを表して
いる。

2. 人として生きる

私が僧侶になったのは、もう 40 数
年前のことである。その時には、い
ろんなことを習ったのだが、一人の
講師から「僧侶に成ったらいろんな
ブレンを持ちなさい」と教わった。
お寺にはいろんな相談にやって来る。

話を聞いているだけでいい場合もあ
るし、僧侶には答えられないことも
ある。専門外だといって帰ってもら
うのではなく、知り合いにその分野
に明るい人がいるからその人に相談
してみようと応対すべきだという。

せっかくお寺を訪ねてくれたのだから、相談をできる専門の人をできるだけ多く作りなさい、と教わった。

困ったときにお寺を訪ねる、そんな時代が過ぎ去ったのかも知れない。困ったことの有無に関わらず、人がお寺を訪れなくなった。その一因は、お寺の門を閉ざすようになったことだろう。物理的に門を閉ざしているのである。閉ざす理由に、治安の問題もある。門を開いて、玄関も無施錠で、怖い思いをしたお寺の話をよく聞いた。また、お寺がほとんど不在である場合も多い。特に最近のお寺は経済的に苦しい。生活のために勤めに出る僧侶や寺族も多い。夜にならないと誰も帰ってこないお寺も多い。

いろいろな問題はあるが、人々の悩みに応えたいと思っている僧侶は多い。私の知る僧侶の多くが人の悩みに応えたいと思っている。特に宗教家として尋ねられた時には、しっかりと応えたいと思っている。

かつて息子さんを亡くされた父親が訪ねてこられた。息子さんは自死であったという。その父親は、私共の寺から数キロメートル先のお寺を訪ねられたそう。そこで、「あなたの息子さんは、あなたがしっかり先祖供養をしてこなかったから亡くな

ったのだ。そして、今、息子さんは迷っておられるから、自分が回向(えこう)して供養(くよう)してあげよう」といわれたそう。耳を疑うような話だった。私はそのお寺に電話をして、そのようなことをおっしゃいましたかと尋ねた。その僧侶と思わしき方は、「自分はそのように言わなかったが、〇〇さんがそのように受け取られたのだ」と答えた。

私はとんでもない話だし、とんでもないお寺だと思うが、近所の人にいわせるとちょっと違うそう。私どものお寺と違ってそのお寺はとても人気があるそう。あの坊さんは「よく見てくれる」というのである。何を見てくれるのかと尋ねると、占いが当たるような話だ。それは仏教の僧侶のすることではない。

私は仏教の僧侶の仕事は、まず話を聞くことだと思っている。そして、僧侶が語ることは経典きょうに基づかねばならない。仏教には「経」があって、それを註釈する「論ろん、疏しよ」がある。そうした「論」や「疏ぎしよまたは義疏」を説明する書物も存在する。仏教の僧侶はこうしたものに基づいて話すべきであるのは、法律家が法に書かれていることに基づいて話すのと同じである。

ところが実際は、思いつきで話を

している僧侶がいるようだ。思いつきで話すのは仏教の僧侶の言葉ではない。そうした偽りの言葉に引き寄せられる人たちもいる。また、偽りの言葉によって仏教のすべてを否定してしまう人たちもいる。どちらも仏教の未来には同じ結果をもたらすだろう。

同じ結果とは、無宗教である。無宗教という考えが戦後の民主化の中で出てきたと考える人がいるかもしれないが、そうではない。おそらく江戸時代中期からだと思う。日本では鎌倉時代に一般の人々に受け入れられる教義をもった仏教理解が出てくる。室町時代には庶民が経済力をつけてくると共に庶民に仏教が広がり始める。戦国時代を経て、江戸時代には戦いに勝ち残った者が権力を集中させていく。権力者にとって政治権力と精神的な権威とが別に存在するのは都合が悪い。特に仏教やキリスト教は地域を越えて普遍的な権威を持つので、権力者には都合が悪いものである。江戸時代になって、国学の発生とともに宗教を否定する考え方が出てくる。同時に民俗宗教が台頭してくる。それまで、自由な気風の中でエネルギーだった仏教は急速に力を失っていく。力を失うとセクト主義に陥って、小さくまと

まって自己防衛をし始める。明治維新で仏教は一時的に息を吹き返したかのように活動的になるが、集権的な国家建設の中で力を失っていく。同様の動きは第2次世界大戦直後にもおこるが、しだいに力を失っていく。

民俗宗教は権力を集中的に握る者に都合がいい。自分の権力域の外と精神的につながる恐れがないから、自国を支配しやすい。例えば、プーチンにとってロシア正教会という民俗宗教は都合のいい宗教である。またアメリカのプロテスタントの一部は、やはり民俗宗教といってもいいだろう。民族を越えて価値観を共有したりしない。狭量な考えを述べて人々を分断していく。それは独裁的に権力を握ろうとする者に都合のいい考えである。

こうした中で、私は聖徳太子の宗教観は注目に値すると思う。当時の日本社会は、国家宗教として仏教を取り入れた。その時代の中で、聖徳太子は仏教を個人の宗教と捉えたようである。一人の人間として、心の救いを仏教に求めた。そこで個人として出会った精神的救済は普遍的な真理であった。聖徳太子は仏教によって民族や地域をはるかに超越した世界に出会っていた。